連　載

刀剣の歴史と思想

第8回

酒井　利信

神話的世界の形成と剣神の誕生

いよいよ今回から、話の舞台は日本へと移っていくことになる。

日本刀剣思想の前段として、そのルーツである古代中国・朝鮮の思想を深く理解することが、われわれの旅のオリジナリティーでもあるが、やはり主題はあくまでも日本人の刀剣に対する思想である。

大陸の思想とはまた違った、独特な世界が繰り広げられている。

まずは古代から話をすすめるが、そこでは神話の中で剣の神が誕生し、神剣、霊剣といわれるものがマジカルに描写される。実にロマンのある世界である。

早速、古代に思いを馳せながら思索をめぐらす旅に出発したい。

▼神話のなかに刀剣の思想を読む

日本の刀剣思想、つまり刀剣を神聖なものとしてみる思想は、各々の時代で、実にさまざまな領域にわたってその事例が多く認められるが、個々が独立して存在していることはなく、古代からの積み重ねの上に、それまでの脈絡を踏襲して成り立っている。

特に古代神話において形作られたイメージというものは、ある種の非常に強い力をもっており、これが後世の思想形成に多大の影響を与えている。私は、これを神話的イメージ（1）といっている。

その意味で、日本の刀剣思想を考えるにあたり、まず最初に古代における神話を読み解くことが重要である。言い換えると、これなくして日本の刀剣思想を理解することはできない。

神話的イメージ：湯浅泰雄がその著『歴史と神話の心理学』（思索社，1985）の中使用した用語である。

湯浅泰雄、三品彰英、松村武雄、大林太良、吉田敦彦、等々の超一流の学者が穿った神話解釈をしているが、皆それぞれ違う。これは何だ？

神話の解釈には、実にさまざまなものがある。先学のあらゆる論説を読みながら、では何が真実か、何が歴史的事実か、などということを考えると、自分たちがしている仕事に虚無感さえ感じることがある。このことをどう理解すればよいのか。

おさえておかなくてはならないことは、日本の古代神話は一つのモチーフによって出来上がったものではなく、さまざまな要素を複合的に含みつつ成り立っているということである。したがって同じ神話であっても、視る側の立ち位置によってさまざまな顔をもっている。このことがあらゆる解釈を可能にする原因である。

神話を解釈するのにどの立ち位置をとるかは自由であり、その意味でロマンがある。

間違いを恐れず、自由な感覚で、今もっている私たちの感性をもって、神話に描かれた刀剣思想を読み解いてみたい。

取り扱うテキストとしては、『古事記』や『日本書紀』、『風土記』などを用いる。周知の通り、『古事記』は勅命により稗田阿礼が暗誦した帝紀や旧辞を、元明天皇の勅により太安万侶が撰録して七一二年（和銅五）に献上したものである。三巻からなる日本最古の歴史書であるが、そのうち上巻に多くの神話を載せる。『日本書紀』は、舎人親王らが編集し七二〇年（養老四）に完成させた勅撰の正史であり、神代に限って「一書に曰はく」といった形で多くの別伝をも収めている。『風土記』は、七一三年に元明天皇が諸国に編集を命じた地誌で、常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の五つの風土記が現存する。

『古事記』編纂に携わった稗田阿礼は、学問・知恵の神として賣太神社（奈良県大和郡山市）の御祭神となっている（写真提供＝賣太神社）

いずれも勅命により編纂されたものであり、ここに収録されている神話には多分に政治色が含まれることが指摘されるが、それも含めて積極的に解釈していく必要があるだろう。

▼神話的世界の形成と天の沼矛

『古事記』や『日本書紀』に記される、いわゆる記紀神話の世界は、基本的に、天つ神がすむ天上界である高天原と、人間と国つ神がすむ下界としての葦原中国、それに地下に位置づけられるような死者の国としての黄泉国が、上下に重なるような構造をなしている。つまり、神々のすむ神聖なる世界を垂直上方に求めるような、垂直方向への超越軸によって成り立っている世界観である。

記紀神話においては、冒頭のいわゆる国生み神話によってこの世界観が形成される。

以下、『古事記』の一文である。

神話的世界

是に天つ神の諸の命以ちて、伊耶那岐命・伊耶那美命、二柱の神に、「是の多陀用弊流国を修め理り固め成せ」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして画きたまへば、塩許々袁々呂々邇に画き鳴して引き上げたまふ時、其の矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能碁呂嶋なり。(2)

栗田眞秀筆「修理固成草圖」(写真提供=伊弉諾神宮)

天つ神の命令で、イザナギとイザナミの男女二人の神は、力を合わせて国土を生むのであるが、まずこの二神は天空に浮かぶ橋から天の沼矛という矛を差しおろして、海水をコヲロコヲロ(原文では音仮名表記)と音をたてながらかき回した。そして、引き上げたこの矛の先から滴り落ちた塩が積もることにより島が出来上がった。二神が、矛をもって呪術的に島を生んだ描写である。この島をオノゴロ島という、といった内容である。

この後、イザナギ・イザナミの二神は、このオノゴロ島に降り立って次々に国土を生む。これが日本列島である、とされている。

まだ天も地も明確に区別されないようなカオスの状態から、天上界にたいして下界が形成されていく過程を描いた国土創成神話である。いうまでもなくこの神話によって作り上げられた世界は、先に述べた超越軸を垂直方向にもつ世界観である。

しかし、実はこういった神話的世界は、再構築された新しい世界観であるという説があり、私もこれに賛同する一人である。そもそも日本に古来語りつがれてきた神話は、神々の世界を水平方向に求めるような世界観であったということも指摘されている(3)。古くから語られてきた神話が、勅命により文章化されてくるまでの過程で、世界観が変化し再構築されたということである。

予想するに、これには多分に中国文化の影響があるように思われる。日本は四方を海に囲まれた島国であるため、海の向こう、水平方向に神々の他界を求めることは十分に考えられる。それに対して中国は大陸文明であり、陸続きの水平方向へは理論的にどこまでも行くことが可能であり、日常の範囲内である。当然のことながら、そこに超越者を求めるような思考は生まれない。

水平世界
垂直世界←

彼らは人間界を支配する超越者を自らの頭上に求めた。それが天である。そして下界の全ての事柄が天命によって決定されるという思想を生み出した。超越者は垂直上方にあるという世界観である。あらゆる文化が中国大陸から伝わってきた古代日本において、新しい神話的世界観も中国思想の影響を受けたと考えて大過ないであろう。

金属文明は、古代、紀元前三世紀末、日本の弥生時代初期に、中国大陸から伝わってきたが、この新しい文明の象徴である金属器の矛によって、新しい神話的世界が再構築されてくるというのがこの国生み神話である。

金属器としての武器が記紀神話に登場するのは、この国生み神話における天の沼矛が最初であるが、この後、矛が神話の中で重要な役割を果たして登場してくることはない。神聖視されて活躍するのは全て剣である。矛は、剣に長い柄をつけた武器であるが、あえてこの国土創成の最初の部分が矛によってなされたのは、天上と地上が隔たった世界観を象徴的に描くためであったとも考えられる。柄のついていない剣では、天上にある神が、これを持ったまま下界の海をかき回そうにも届かない。神話的世界観の形成を、矛により象徴的に表した描写である。

▼火神の神話と剣神の誕生

国を生み終えたのち、イザナギとイザナミの二神は、海の神、風の神、木の神、山の神、野の神といったさまざまな神を生む。

次に火之夜芸速男神を生みき。亦の名は火之炫毘古神と謂ひ、亦の名は火之迦具土神と謂ふ。此の子を産みしに因りて、美蕃登炙かえて病み臥せり。――中略――故、伊耶那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。

火に対する畏怖の信仰

そしてイザナミは、最後に火の神であるカグツチを生んだことにより、女陰を焼かれてついに死んでしまう。

ここには古い火に対する畏怖の信仰が表れている。原始古代において火山の爆発や、あるいは落雷により発生する火は、あらゆるものを焼き尽くす恐ろしいものであり畏怖の対象であったはずである。カグツチはこういった古い畏怖の対象としての火を象徴する神であり、従ってこの神話の中では、自らの母親をも焼き殺す恐ろしい存在として描写されている。

イザナミを喪ったイザナギの悲しみようは凄まじいものがあり、その枕辺に這いつくばり号泣したという。そして『古事記』では、次のように続く。

是に伊耶那岐命、御佩せる十拳剣を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りたまひき。

イザナギは、イザナミを死に至らせた火の神カグツチを、もっていた十拳剣で斬り殺した。

この神話をどう解釈するか。私は、古い火に対する畏怖の信仰を、最先端文明である剣によって断ち切ったことを表す神話である、と解釈している。

解釈：最先端文明である剣
斬る
←
火に対する畏怖の信仰

ここに登場する「十拳剣」とは、『日本書紀』においては「十握剣」と表記され、握り拳十個分の長さのある剣のことをいい、固有名詞ではない。この剣については、この後の部分で、「故、斬りたまひし刀の名は、天之尾羽張と謂ひ、亦の名は伊都之尾羽張と謂ふ」と記されている。神話の中に登場する剣で重要なものにはその剣の性格を表徴するような固有名詞がつけられている場合が多いが、ここでも天之尾羽張あるいは伊都之尾羽張という名がつけられている。この名称にどういった意味があるのかというと、「天之」は天上界にあるものに対する美称であり、「伊都」は神の威光があり威勢が鋭いことを表すが、問題とすべきは「尾羽張」である。これは両方の刃が張り出した剣のことを意味している。この名称には、当時の剣に対する観念が内包されているように思う。中国において剣は、対立・相待の関係にあるものを統合するために神聖であった。そのことを、古代中国道教では、剣が表裏一体であるためという説明もなされていた。これが古代日本においては、更なる展開があって、剣に両刃がついているその形体に、対立・相待にあるものを統合する性質を象徴的にみていたのではないか。そのことが刃を大きく強調し

伊弉諾神宮（写真提供＝伊弉諾神宮）

中国：表裏一体
←
日本：両刃の象徴性

剣神の誕生

た剣が、神聖なる剣として、母を焼き殺した邪悪な火神を斬る話として伝えられるようになったのではないか。

ここには日本的な〝剣の観念〟が窺われる。

この後、火神をこの尾羽張の剣（十拳剣）で斬ったことにより、血がまわりの岩群に飛び走り、さまざまな神々が生まれる描写が続く。

爾に其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、石析神。次に根析神。次に石筒之男神。次に御刀の本に著ける血も亦、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、甕速日神。次に樋速日神。次に建御雷之男神。亦の名は建布都神。亦の名は豊布都神。次に御刀の手上に集まれる血、手俣より漏き出でて、成れる神の名は、闇淤加美神。次に闇御津羽神。

上の件の石析神以下、闇御津羽神以前、并せて八神は、御刀に因りて生れる神なり。

ここでは、あえて「御刀に因りて生れる神なり」と記されていることから、これらの神々は刀剣から生まれたというように観念されている。この件でまず注目すべきは、刀剣から生まれた神々の中にタケミカヅチ（建御雷之男神）が含まれているということである。この神は、後に国譲り神話や神武東征神話で大活躍をする剣の神である（同時に雷神でもある）。古代日本はアニミズムの世界であり、あらゆる自然物が神として観念されたが、ここでは文化産物としての剣が神として描かれている。当時、剣は単なる金属器ではなく、神として崇められる神聖性をもっており、これが剣神の誕生として語られているということである。

中国思想のように、剣の神聖性をいろいろ根拠づけて説明しようとはしない。いきなり神として神話に登場してくるところに、日本的な特徴がある。

▼作剣のモチーフ

この火神の神話には、実はもう一つ非常に面白いモチーフが潜んでいる。

ここであげた記述は『古事記』の本文であるが、火神の神話は、他に『日本書紀』本文ならびにいくつかの別伝に記されており、各々その内容に違いがある。この神話はトータルで見ると、火神が母親であるイザナミを焼き殺す前半部分と、イザナギが火神を斬り殺しその剣からさまざまな神が生まれる後半部分とからなっているが、その記述の有無がまちまちである。これはどういうことかというと、古い火に対する畏怖の信仰を語る前半部分に、後半部分が新しく付け加わったということである。

ここでは特に後半部分に注目すると、火神を斬った剣から生まれた神々は、石析神、根析神、石筒之男神、甕速日神、樋速日神、建御雷之男神（建布都神、豊布都神）、闇淤加美神、闇御津羽神であるが、これらの神々はそれぞれアニミズム的に自然物を象徴する神々である。

さまざまな解釈があるものの、およそ先学の理解をまとめると、石析神・根析神は岩および雷の神、石筒之男神は岩の神、甕速日神・樋速日神・建御雷之男神（建布都神、豊布都神）は雷および火の神、闇淤加

湯浅泰雄の神話解釈の方法論：
『古事記』と『日本書紀』別伝の記述内容を比較する

火の神
岩の神
水の神
→ 刀剣鍛造のモチーフ

美神・闇御津羽神は水の神と考えて間違いない。古代において雷は火を天上から地上に運ぶものとされていたことから、火と岩と水の神々がここで生まれてきたことになる。

藤安将平刀匠による刀剣鍛造の様子

これが何を意味するのかというと、鋼（はがね）を火で赤く熱して、岩の上で鍛え、水に浸して焼き入れをする、刀剣の鍛造を表現している。十拳剣で火神を斬った時に、血がまわりに飛び走る描写は、鋼を真っ赤に焼いて槌で鍛えた時に火花が飛び散る様を表現しているとも解釈できる。

刀剣の製作過程については、中国とは異なり、日本の場合ほとんど重視して取り上げられることはないが、この神話において唯一、刀剣鍛造のモチーフが窺われる。剣の神聖性を作剣の過程に求めた中国思想の名残であるのかもしれない。

この件でもう一つ注目しておきたいのは、新たに刀剣から生まれてきた神々の中に火の神が含まれているということである。畏怖の対象であった古い火は、中国からやってきた新しい金属文明の表徴である剣によって断ち斬られ、そこから岩や水とともに新しい火が生まれ、この火が最先端文明である刀剣を作る。古代信仰が変容する節目に、刀剣文化が大いに関わっていたことが分かる。それほどまでに、当時、新しくやってきた光り輝く刀剣に、相当のカルチャーショックを感じていたことは間違いない。だからこそ、剣は神にまで昇華して崇められたのであろう。

新たな火の誕生

〈註〉

（1）「神話的イメージ」という用語は、そもそも湯浅泰雄氏がその著『歴史と神話の心理学』（思索社、一九八四）で使用したものである。

（2）本稿における引用文は、倉野憲司他校注の岩波本『古事記』（日本古典文学大系、一九五八）からの引用であるが、字体については基本的に現在通行のものに改めた。

（3）こういった説をとなえるものに、上田正昭氏の『日本神話』（岩波書店、一九八七）や吉井巌氏の『天皇の系譜と神話』（塙書房、一九七六）などがある。

破壊的な火（畏怖の対象）
←
創造的な火